

おじいちゃんが見た戦争

北谷町立北玉小学校

四年 米須 帆隆

「空しゅう警報聞こえてきたら今はぼく達小さいから、大人の言う事よく聞いて、あわてないで、さわがないで、おちついて、入っていきましょう防くうごう。」

みなさんは、この歌を聞いた事ありますか。この歌は、ぼくの七十三才のおじいちゃんが六才で幼稚園生だった頃、幼稚園の先生が教えてくれた「空しゅう警報が聞こえたら」という歌だそうです。

ぼくのおじいちゃんは、戦争でお父さんと、たくさんのおおせきをなくしました。ぼくだったら、たえられません。戦争が始まる前、兵たいのために、米と野菜をおさめないといけなくなりました。おじいちゃんのお父さん、ぼくのひいおじいちゃんは、三十二才で防えいたい召集されたため、おじいちゃんのお母さん、ひいおばあちゃんが一人で言いつけられた分、畑で用意しました。言いつけられた分を、畑で用意できない時は、となり村から買ってきてでも、おさめないといけなかったそうです。おじいちゃんは、自分のお父さんの顔も声もおぼえていないけど、軍服を着せて、けいれいしてくれた事や、かたぐるましてもらった事は、おぼえているそうです。

戦争が始まると、おじいちゃん達は、ワチバル山という山にひなんしたそうです。そこには、あちこち、自然にできたごうがあつたからです。おじいちゃんは親せきたち二十人位でごうにかくれました。ごうの中はしようにう石からチョンチョンとしくがたれて、いつでも暗くてじめじめしていました。ごうの中では、イモを食べていました。イモは、まえのばんにたきました。昼だとけむりがたつて、ときに見つかるので、夜にごうの中でイモをたくそうです。

おじいちゃんは、死にかけた事が二回あるそうです。一回目は、ごうから出て山の上で、遊んでいる時、ときのセスナきに見つかってしまいました。あわててごうに走っていき、入り口で足を洗っていると、ヒューバンバンと、すぐ近くにたまが落ちたそうです。ごうの中にいたおばさんが、おじいちゃんをひっぱつたので助かったそうです。二回目は、ごうの前の石にすわつて、お母さんに髪を切ってもらつた時です。半分切りおわつた時、近くの川にポーンとたまが落ちて、とびちつた真つ赤なへんが、おじいちゃんのおそばに落ちて、反対がわにはね返つていったそうです。とんでくるはへんが、もし、おじいちゃんの方へはね返つていたら、もう命はなかったそうです。もし、おじいちゃんが死んでいたら、お母さんも、ぼくも、いとこも生まれていなかったんです。そう考えると、おじいちゃんが生きていてくれて良かったです。

家のうしろに作つたごうに移動する時、キビ畑で、誰かが音をたててしまつたら、それと同時に、たくさんのおたまがとんでくる。本当にこわかつたそうです。その頃、もう戦争は終わつていて、ほりよの人は集められていました。でも、おじいちゃんたちは、その事を知らなくて、ごうの中にずっとかくれていたそうです。親せきの人に、

「ここにいたら、アメリカ兵に手りゅうだんうちこまれて殺されるよ。早く出ておいで。」と言われ十五人位で出ていきました。アメリカ兵は、こうさんして出てくる人は殺さないけど、ごうから出てこない人達は火えんほうしやきで、殺してしまつたそうです。そのうちスピーカーで、「戦争は終わったよ。いつまでもごうに入っていたら、死んでしまうよ。」

と放送されました。戦争は、終わったのです。でも、おじいちゃんの家も村もアメリカ軍にと

りあげられてしまいました。戦争は、大切な人の命も、生まれ育った家も村も、たくさんものをうばったのです。ぼくたちは戦争のおそろしさや、おじいちゃんが体験したつらい気持ちすべてわかっていません。だけど、おじいちゃんの話や新聞やテレビニュース、学校で戦争について聞く度に、もう二度と戦争がおきてはいけないことを強く思います。そのためには、ぼくたちがおじいちゃん、おばあちゃんから聞いた話をぼくたちの子どもにしっかりと語りついでいこうと思います。おじいちゃんとおばあちゃんには、これからも長生きしてもらって楽しい人生をおくってほしいです。